

国立台湾大学図書館蔵『和漢朗詠集私注』の字音について

A Study of Sino-Japanese Lexical Grosses in *Wakan Roishū* (和漢朗詠集) Owned by the Library of National Taiwan University

加藤 大鶴
KATO Daikaku

一 本稿の目的

国立台湾大学図書館特蔵室には、日本統治期における帝国台北大学時代に購入した膨大な和本が蔵されている。¹⁾ 本稿で取り上げる『和漢朗詠集私注』(以下、私注)はその一冊である。本資料は藤原公任によって編まれたとされる『和漢朗詠集』の注釈書であり、平安期以来貴族を中心とした層に口誦・朗吟された和歌・漢詩の解説書としての性格を持つ。『和漢朗詠集』そのものが漢詩文の入門書として盛んに用いられ実際に発音されたと考えるならば、私注に記された仮名注もまたある時代の発音を反映したものと想定されるのであって、日本語史の資料としてどのような性格を有するものか検討することは許されよう。二〇一九年八月

に本資料を閲覧する機会が得られた記録として、本稿に小さな報告をまとめる次第である。

二 資料について

本資料は本稿の目的に記したとおり台湾大学図書館特蔵室に蔵される(書籍番号一四六七〇、総登録号三三八六三一)。列帖装一冊、四十四丁、半丁八行の体裁で、本文は墨書、朱筆による合点等の書き入れがある他、本文と同筆かと推測される助詞や字音注などが仮名で附されるが、いくつかは本文と異なる墨筆による。その他、書誌学的な特徴は松原孝俊主編・中野三敏監修二〇〇九による解題、一九五頁に詳しい。第一丁に「倭

漢朗詠集私注巻第一」とあるが、実際には注釈部分を除いて本文部分のみが抄出されている。²⁾序はあるが跋文はない。同問題によれば、「こうした『私注』の本文のみを摘出した本はままある」とのことである。虫損夥しく判読が難しいところも多く、本稿末尾の「注記付き項目一覧」にも示す如くである。この資料の末尾には「于時永祿七年^{子甲}五月五日書之・／岩屋山／妙楽寺常侍」の奥書と「妙楽密寺」の墨文方印を付す。岩屋山妙楽寺は福井県小浜市にある高野山真言宗の古刹のことであろう。³⁾

『日本古典文学大辞典』（岩波書店、一九八六）によれば、信阿なる僧が応保元年（一一六一）に私注を草したとあり、原態としては六巻になるらしい。前三巻を四季部に、後三巻を雑部として本文に訓点を付し、⁴⁾原題と作者を掲げて語釈を示すとあり、このことは伊藤正義・黒田彰・三木雅博編著一九九七、山内潤三・木村晟・枳尾武編一九八二、柳澤良一編二〇一〇などでも確かめることができる。また諸本については、一四世紀の卷子本のほか、東大国語研究室所蔵室町期写本を代表とする冊子本などがあることが知られる。⁵⁾国立台湾図書館蔵本は奥書の永祿七年（一五六四年）という記載から室町期の写本であると分かるが、写本の系統については言及する準備がない。本稿では本資料に現れる字音の仮名音形にかかわる注記類を報告し、その日本語史上の概略的な性格を述べるにとどめたい。

三 注記のある項目について

本資料の本文には『和漢朗詠集』の漢詩が並び、その漢字・漢語に字

音の読みが書き入れられている。それらを整理したものが、本稿末尾の「注記付き項目一覧」である。第三節ではこの一覧から、本資料の日本語史上の性格を考える上で有用なものを取り上げ、分析を行う。

三、一 ㄗウとㄗウにかかわる区別について

歴史的字音仮名遣いの漢音では、基本的に江撰、效撰肴・豪韻、宕撰、梗撰二等韻はㄗウ、通撰東（直音）韻、曾撰蒸・登韻はㄗウとなることが知られている（沼本克明一九八六他）。また、両者がいわゆる才段長音の開合の別として区別されていたのは室町末期頃までと考えられている。本資料でもこの区別はほぼ保たれていると見られる。⁶⁾傍線を付した例は中国語原音との対応から異例となるものである。なお、本資料ではㄗウ等を表記する際に二字目に「ウ」と「フ」を混用している。⁷⁾

■ㄗウが期待される字

- 江撰 362絳（カウ）、654項（キヤフ）、349雙（サウ）
 效撰 249膏（カウ）、188皓（カウ）、369皓（カウ）、274嶠（カウ）、470藻（サウ）、257棹（タウ）
 宕撰 423康（カフ）、216行（カウ）、106匡（キヤフ）、257郷（キヤウ）、654莊（サウ）、274爽（サフ）、758象（シヤフ）、499壤（シヤウ）、741壤（シヤウ）、145釀（シヤフ）、376釐（シヤフ）、532濃（シヤウ）、391磬（シヤウ）、658洋（ヤウ）、660閻（ラフ）
 梗撰 234耿（□ウ）、668勁（キヤフ）、584声（シヤフ）、261彭（ハウ）、274

孟(マウ)、514 魴(マウ)

梗撰庚韻三等字、清韻字は漢音でㄷイ、呉音でㄨヤウ・ㄨとなるから、668 勁(キヤフ)と584 声(シヤフ)は呉音とみる。效撰は基本的にㄨとなるが、明母豪韻字は両唇音が主母音に影響してㄨとなる(有坂秀世一九四一)。208 毛(ボフ)はこれを反映したものであろう。

■ㄨが期待される字

通撰 325 虹(カウ)、286 叢(ソウ)、276 峯(ホウ)、296 僮(トウ)

通撰東韻の虹(カウ)は異例となる。本文とは別筆による書き入れであり、後代のものか。

三、二 ㄨ・ㄨ・ㄨにかかわる区別について

歴史的な字音仮名遣いによる漢音では、基本的に通撰東韻三・四等、遇撰虞韻、流撰尤・幽韻はㄨ、效撰蕭・宵韻はㄨ、通撰鍾三・四等韻、曾撰蒸三・四等韻はㄨヨウ(ヨウ)となることが知られる(沼本克明一九八六)。このうちㄨとㄨヨウ(ヨウ)は院政期から共に拗長音となり表記としては混乱するに至るといふ。曾撰蒸三・四等韻に該当する仮名音形は資料に現れなかった。なお、和語に一例のみレウとリヨウの混乱例(347 愁(ウリヨウ))が見られた。

左記の例では、ㄨが期待される效撰蕭・宵韻字にㄨとㄨヨウ(ヨウ)の両用がみられる。後代の別筆かと考えられるものに、00 邵(ゼウ/シヤウ)があった。ㄨヨウが期待される通撰腫韻字にもヨウとㄨが

みられる。通撰腫韻の686 勇(ユウ)は呉音形と思しい。

■ㄨが期待される字

效撰蕭・宵韻 248 瑤(エウ)、311 樵(セウ)、698 顛(セフ)、54 韶(セウ)、00 邵(ゼウ/シヤウ)、786 窕(テウ)、222 姝(ベウ)、308 搖(ヨウ)、348 腰(ヨ)、786 窈(ヨウ)、162 招(チヨウ)

■ㄨヨウが期待される字

通撰腫韻 243 重(テウ)、686 勇(ユウ)、114 溶(ヨウ)

いわゆる「割る」音であるㄨは古くからㄨと両様に発音されることがあったようだが、拗長音(ㄨ)化にからんで表記が混乱していくのは南北朝期に入ってからと推定されている(沼本克明一九八六、二五五頁)。沼本の記述に基づけば、左記遇撰はㄨとㄨの両様が現れること、これは平安期にも見られることである。流撰はㄨが多いなかに、651 酉(ユフ)、644 郵(ユフ)、530 牖(ヨウ)などが混入している。303 繡(シウ/シユウ)ではシユウが別筆である。

■ㄨが期待される字

遇撰虞韻 671 樹(シフ)、695 乳(ジフ)、261 莢(ユ)、237 楡(ユウ)
流撰尤・幽韻 311 優(イフ)、338 九(キフ)、310 楸(シウ)、670 岫(シウ)、348 愁(シウ)、349 袖(シウ)、363 袖(シユウ)、303 繡(シウ/シユウ)、356

酎(チウ)、651酉(ユフ)、644郵(ユフ)、530牖(ヨウ)、00劉(リウ)

この他、唇内入声字㊦フ㊧ウを経て拗長音化したと思しき咸撰葉韻字591撰(セウ)、668捷(シヨフ)などがあつた。

三、三 その他

■合拗音

カ行合拗音「クワ」「クキ」「クエ」(濁音とも)のうち「クキ」「クエ」は鎌倉時代後半になると直音表記「キ」「ケ」にはほぼ統一されるといふ。本資料でカ行合拗音が確認されるのは、400誇(クワ) 溪母麻韻合二等、209槐(クワイ) 匣母陽韻合二等、308槐(クワク※クワイの誤表記か)、400還(クワン) 匣母刪韻合二等の四例のみである。106匡(キヤフ) 溪母陽韻合三等、271蕙(ケイ) 匣母霽韻合四等は先行研究が述べるとおり、室町時代ではそれぞれ原音に近いクキヤウ、クエイとはならず直音となっている。

■促音化

240三六(リツ) 宮は、喉内入声韻尾字(㊦E) が後続するカ行音の影響で促音化した例、398入(ジツ) 松は唇内入声韻尾(㊦E) に無声子音が後続する場合に促音化した例、とそれぞれ考えられる(沼本克明一九八六、二三三〜二三七頁)。

■一拍字の長音化

321書(シヨウ) 書母魚韻開三等字は一般的には「シヨ」、227浮(フウ) 奉母尤韻開三等字は一般的には「フ」、674被(ヒイ) 並母紙韻開三等字は一般的には「ヒ」であるが、この三例は二拍に伸ばした形を表記する。

■呉音読みの混入

本資料では漢字音は基本的に漢音読みとなっている⁷⁾。いま清濁音(呉音で鼻音、漢音で濁音となるもの)をいくつか取り出せば、398入(ジツ)、695乳(ジフ)、666軟(ゼン)、264脈(バク)、374枚(バイ)、388枚(バイ)、376毛(ボ)のごとく漢音形となっていることが確かめられる。

しかしわずかに呉音読みの混入も認められる。632期(ゴ)、584声聞(シヤフモン)、275頭目(ツ団ク)、449乳(ニフ)、といった例は、『和漢朗詠集』の読みとして慣用されていたことがまずもって推し量られるが、『和漢朗詠集』専修大学図書館蔵建長三年(一二五)菅長成書写本では「声聞」に声点去声+上声、「期」に声点平声濁とあり、いずれも呉音の声点とおぼしい。また「頭目」(ツモク去声濁+入声)は仮名音注・声点ともに呉音とみて良いだろう。正慶元年(一三三二)校点本でも「頭目」(ツモク上声濁+入声)とあり、専修大学図書館蔵本の読みと本資料の読みを否定しない。本資料の漢字音は音韻史上の時代的な特徴を有しながらも、『和漢朗詠集』そのものの読み癖との関連から論じられる必要があるだろう。⁸⁾

■ 諧声符読み、その他

222 脆(キ)はゼイとあるべきを諧声符によって取り違えたものである。463 抑(キヤフ)はヨクとあるべきを仰(ギヤウ)と取り違えたことよって、257 戎(ジュツ)は成(ジュ)とあるべきを、323 范(パウ)は茫(パウ)とあるべきを、371 屢(ル)は履(リ)とあるべきを、それぞれ漢字の類似により取り違えたことよって、記したものである。162 招(チヨウ)もシヨウとあるべきを超(チヨウ)などに類推することを取り違えたと考えられよう。477 獲(ギヤク)はクワクとあるべきところであるが、ギヤクとなった経緯は不明である。

269 酈(テツ/レキ)は厄介である。この字音は広韻に「縣名在南陽…」とする反切「郎撃切」に該当すると考えられるが、その日本漢字音はレキ(来母錫韻開四等)であろう。岩波大系本では「テキ」とする。『和漢朗詠集』正慶元年(一三三三)校点本では「テキ/テツ」、専修大学図書館蔵建長三年(一二五一)菅長成書写本では「テキ」、国会図書館蔵本では「レキ」とある。『和漢朗詠集』の伝授、注釈活動のなかで伝えられた読みであろうと推測される。

四 結語

以上、国立台湾大学図書館蔵『和漢朗詠集私注』の字音の仮名音形について、その特徴を概略した。ここに現れる仮名音形は三、三節で見たような呉音読みの混入や諧声符読みで検討したことからすれば、まずは『和漢朗詠集』写本に見られる仮名音形との比較対照で論じられるべき

ものである。その上で、三、一節で見たように㊦ウ・㊧ウの開合の別を保持している特徴からすれば、仮名音形が永祿七年(一五六四)の本文書写と同時期に書き入れられたと考えて齟齬を生ずるものではないといえる。少なくとも江戸期以前の様相を伝えていると考ええることに問題はなだらう。また三、二節の検討からは、平安末期〜鎌倉期に生じた㊦ウ、㊧ウ、㊩ヨウの混乱を書写の過程で継承しているとも考えられた。

いずれにしてもこの資料単体から分かることはそう多くはない。本稿のなかで繰り返し触れてきたように、『和漢朗詠集』そのものの読まれる方の伝承と日本語史上の知見との関係のなかで、資料的特徴が定位されるものと考えられよう。以上で、この小さな報告を閉じたい。

注記付き項目一覧

本資料に現れる注記類のうち、主として日本語学的な関心に触れるものを以下に掲げた。漢字音や音便にかかわるものが中心となっている。各項目の頭に示したアラビア数字は川口久雄・志田校注『日本古典文学大系第七三 和漢朗詠集・梁塵秘抄』岩波書店、一九六三に掲げる歌番号に対応する。大系本になく、私注である本資料にのみ存在する場合は「00」と記した。出現箇所については「()」に丁数・裏表・行数を記した。その他、別筆による書入や古体の仮名などについては「()」に備考として記してある。虫損・汚損等で判読が難しい箇所は□や□などとした。

- 00 后稷シヨウキ〔二ウ七〕
- 00 邵公ゼウキ〔邵〕字「ゼウ」右傍に「シヤウ」〔二ウ七〕
- 00 公劉リウ〔二ウ七〕
- 00 爾ニ〔二ウ七〕
- 54 韶光サウカウ〔四ウ三〕
- 60 翩翩ホシホシ翻タリ〔四ウ七〕
- 63 遺賢イ〔五オ二〕
- 68 魚躍イウヤク〔五オ六〕
- 96 攬花クワイ〔「字は大系本「瓊」〕〔六ウ一〕
- 106 匡廬山キヤウロウ〔七オ一〕
- 109 潭心タンシンニ〔七オ三〕
- 109 蘋ヒン〔七オ三〕
- 114 溶々ヨウゾウ〔七オ六〕
- 145 宿釀シヨウヤウハ〔八オ四〕
- 156 危フツテ身ニ〔八ウ五〕
- 156 故園コエンニ〔八ウ五〕
- 160 露簾清ロセン瑩エイ〔八ウ七〕
- 160 風襟瀟灑フウキンシヨウサイ〔八ウ八〕
- 162 班婕妤ハンシヨウカ〔九オ一〕
- 162 招涼チヨウリョウ〔九オ一〕
- 163 新函シンタン〔九オ二〕
- 163 臨水リンスイ〔九オ二〕
- 171 楸欄クウラン葉エ〔九オ七〕
- 172 金鈴キンレイ〔九オ七〕
- 182 曙雲シヨウウン〔九ウ八〕
- 188 皓々カウカウトシテ〔十オ四〕
- 208 二毛ニボウ〔二一オ三〕
- 209 槐花クワイ〔二一オ三〕
- 213 別緒ベツシヨ〔二一オ八〕
- 216 行燭カウカク〔二一ウ一〕
- 217 心期シンキ〔二一ウ二〕
- 221 題詩タイシ〔二一ウ五〕
- 222 森芒センマウ〔「森芒」は大系本「眇茫」〕〔二一ウ五〕
- 222 清脆セイスイトシテ〔二一ウ五〕
- 227 浮花フウカ〔二二オ一〕
- 234 遲々チチタルタル〔二二オ七〕
- 234 耿耿クワンクワンタルタル〔二二オ七〕
- 235 燕子エンシ〔二二オ七〕

- 257 兼葭洲トカノ (一二二ウ一)
- 237 榆柳宮ユウノ (一二二ウ一)
- 240 秦甸シノ (一二二ウ三)
- 240 凜々リンノ (一二二ウ三)
- 240 三十六宮リツ (一二二ウ三)
- 240 澄々テイノ (一二二ウ三)
- 241 怨別エン (一二二ウ四)
- 243 崇山ス (右傍「ス」別筆) (一二二ウ五)
- 243 千重チウ (右傍「テウ」濁点) (一二二ウ六)
- 243 洛水ラク (一二二ウ六)
- 248 瑤池エウ (一二三〇一)
- 249 金膏カウハ (一二三〇二)
- 249 冷漢レイ (一二三〇三)
- 250 李夫人リ (一二三〇三)
- 250 漢皇カン (一二三〇三)
- 254 黔中ケン (「黔」字は大系本「黔」) (一二三〇六)
- 256 豊嶺ホウ (一二三〇七)
- 257 郷涙キョウ (一二三〇八)
- 257 征戎セイノ (「戎」字は大系本「戌」) (一二三〇八)
- 257 棹歌タウ (一二三〇八)
- 261 辭巢シノ (「辭」字右傍「一」に濁点) (一二三ウ三)
- 261 茱萸シュ (「茱」字は大系本「赤」) (一二三ウ四)
- 261 旧跡セキ (右傍「セキ」別筆) (一二三ウ四)
- 261 彭祖フ (右傍「ハウ」別筆) (一二三ウ四)
- 263 三遲チ (一二三ウ五)
- 263 餘家カ (一二三ウ七)
- 264 地脈バク (一二三ウ七)
- 264 李顔ネン (右傍「ネン」「カン」別筆) (一二三ウ七)
- 264 五百箇歳ハク (一二三ウ七)
- 268 嵐陰ラン (右傍「ラン」別筆) (一二四〇三)
- 269 躑躅チツノ (一二四〇四)
- 270 長生セイ (一二四〇五)
- 271 蘭蕙苑ケイ (一二四〇五)
- 271 蓬萊洞ホ (右傍「ホ」「ライ」別筆) (一二四〇六)
- 274 崑函カウ (右傍「カウ」「カン」別筆) (一二四〇八)
- 274 蕭瑟シウ (右傍「シツ」別筆) (一二四〇八)
- 274 雲衢クニ (一二四〇八)
- 274 孟賁マウ (右傍「マウ」別筆) (一二四〇八)

- 274 爽籟ウツライ (一四ウ二)
- 275 頭目ツロウ (一四ウ二)
- 276 文峯ホホ (右傍「ホウ」別筆) (一四ウ二)
- 276 白駒ク (右傍「ク」別筆) (一四ウ二)
- 279 呼ヨラシ (右傍「ヨウンテ」別筆) (一四ウ八)
- 279 偕老カイ (右傍「カイ」別筆) (一四ウ八)
- 286 叢ソウ (右傍「ソウ」別筆) (一五オ五)
- 289 燕姬キキ (右傍「キ」仮名古体) (一五オ八)
- 292 薤ガイ 境ニ (「境」字は大系本「壠」) (一五ウ二)
- 296 閑寂カンセキ (一五ウ五)
- 296 家僮ト (一五ウ五)
- 302 纈カク 纈ニ (一六オ一)
- 303 錦繡キンシウ (一六オ二)
- 307 空階カイ (一六オ五)
- 308 宮槐クワ (一六オ六)
- 308 揺落ヨロ スト (一六オ七)
- 310 梧楸シウ (一六オ七)
- 310 鷗鵠シウコ (一六オ八)
- 311 樵蘇セウソ (右傍「セウ」「ソ」別筆) (一六オ八)
- 311 優遊ユウ (一六ウ二)
- 311 葛稚仙チ (右傍「チ」別筆) (一六ウ二)
- 312 呉苑ゴ (右傍「ゴ」別筆) (一六ウ二)
- 318 彭蠡レイ (一六ウ五)
- 321 書シ (「書」字右傍に別筆にて「シヨウ」) (一六ウ七)
- 321 錦機キンキ (一六ウ八)
- 323 范叙バンシウ (右傍「バウ」別筆) (一七オ一)
- 325 新虹カウ (右傍「カウ」別筆) (一七オ三)
- 327 思婦フ (右傍「フ」別筆) (一七オ五)
- 335 食ヘイ 葦ヘイ (一七ウ二)
- 338 九月キウ (一七ウ五)
- 339 雅琴ガキン (左傍「ガ」「キン」別筆) (一七ウ六)
- 341 寒霧フ (一七ウ八)
- 341 蘋風ヒン (一七ウ八)
- 342 馬鞍アン (一八オ一)
- 00 思婦フ (私注書陵部本231に「思婦」とあり) (一八オ三)
- 347 愁ウ (右傍「ウリヨウ」別筆) (一八オ五)
- 348 辺愁シウ (右傍「シウ」別筆) (一八オ六)
- 348 腰圍ヨウイ (右傍「ヨ」別筆) (一八オ六)

- 349 雙袖サウシウ（右傍「サウ」「シウ」別筆）（二八オ六）
- 349 兩眉リウメイ（右傍「ビ」別筆）（二八オ七）
- 350 鷄ケイ（右傍「ケイ」別筆）（二八オ七）
- 353 蹉跎サクト（二八ウ二）
- 354 簾リエン（二八ウ二）
- 354 綿メン（二八ウ三）
- 356 数盃スウハ（右傍「ハイ」別筆）（二八ウ五）
- 356 温酌ウンヂョク（二八ウ五）
- 362 黄醅ワウパイ（二九オ三）
- 362 綠醅リョクパイ（二九オ三）
- 362 絳帳セウテウ（二九オ三）
- 363 臘袖ラツシュウ（左傍「シユウ」別筆）（二九オ四）
- 365 獸炭ジュウタン（右傍「キン」「タン」別筆）（二九オ五）
- 367 凋年テウネン（二九オ八）
- 369 四皓シカウ（二九ウ一）
- 371 葛屨カクケ（履）字右傍に別筆「ク」）（二九ウ二）
- 374 枚庾亮バイコウリョウ（双行部、私注書陵部本254に「枚叟…庾亮」とあり）（二九ウ四）
- 376 鶴カク（二九ウ七）
- 380 斑女ハンニョ（二〇オ一）
- 385 鶴唳カクレイ（二〇オ四）
- 388 霸ハ（二〇オ八）
- 388 枚バイ（二〇オ八）
- 389 胡塞コサイ（右傍「ソク」別筆）（二〇オ八）
- 391 麀ユウ（二〇ウ三）
- 391 竜領リウリョウ（二〇ウ三）
- 398 入松ジュウソウ（二一オ三）
- 400 誇尚クワシヤウ（誇）字右傍に「ホコル」）（二一オ五）
- 400 往還ウワン（二一オ六）
- 407 崎嶇キキョク（右傍「キ」は仮名古態）（二一ウ三）
- 408 淮王ワイ（二一ウ四）
天台山第八重在之
- 411 紫蓋サイカイ（二一ウ六）
- 412 清漪セイイ（二一ウ八）
- 423 嵇康ケイカウ（二二ウ三）
- 424 錯午サウ（二二ウ四）
- 433 迸笋ヘイソ（二三オ三）
- 436 百圍ハクイ（草）字は虫損）（二三オ七）

- 449 性セイ〔二三ウ八〕
- 449 乳ニラス〔二三ウ八〕
- 458 一穂スイ〔二四オ六〕
- 462 霓裳ケイ〔二四ウ二〕
- 463 掩抑エンキヤツ〔二四ウ四〕
- 470 浮藻サウ〔二五オ三〕
- 472 言語ゲンギヨ〔二五オ五〕
- 477 獲麟ギキョク〔二五ウ二〕
- 482 生計セイケイ〔二五ウ七〕
- 489 王勤郷セキ〔右傍「キ」は仮名古体〕〔二六オ五〕
- 499 土壤シヤウ〔二六ウ五〕
- 508 迅瀨ジンライ〔「ジ」の濁点は後補か〕〔二七オ五〕
- 511 杜若シヤク〔「ジ」の濁点は後補か〕〔二七オ八〕
- 514 舳艫サツマツ〔二七ウ二〕
- 530 危牖キヨウ〔二八ウ二〕
- 532 瀼々シヤウ〔二八ウ四〕
- 541 雲碓ロイ〔二九オ二〕
- 550 潁水エイ〔二九ウ二〕
- 565 碧毯タン〔三〇オ七〕
- 567 山畦カク〔三〇オ八〕
- 568 蕭索サウソク〔三〇ウ一〕
- 584 声聞シヤウモン〔三一オ五〕
- 591 引棋ビツ〔三一ウ三〕
- 613 泰適エキ〔三二ウ五〕
- 619 桂楫シヤク〔「楫」字は大系本「楫」〕〔三三オ三〕
- 632 期遙キヨウ〔三三ウ七〕
- 644 郵船ユウセン〔三四ウ二〕
- 651 己酉キユウ〔三四ウ七〕
- 654 項莊キヤウサウ〔右傍「キ」は仮名古体〕〔三五オ四〕
- 658 洋々ヤウヤウ〔右傍に「タ、ヨウ」〕〔三五ウ一〕
- 660 崑閬クワン〔三五ウ二〕
- 666 庫車コシャ〔三五ウ八〕
- 666 軟輦ゼン〔三五ウ八〕
- 668 勁捷キヤウシヤク〔三六オ二〕
- 669 昇湖テイ〔「昇」字は大系本「鼎」〕〔三七オ四〕
- 670 梧岫シヤク〔三七オ四〕
- 671 瓊樹シヤク〔三七オ五〕
- 674 帛ハク〔三七オ八〕

- 752 咎犯キゴウ〔四〇ウ七〕
- 742 残ノ〔四〇オ七〕
- 741 黄シヤウ壤ヤウ〔四〇オ六〕
- 710 衛エ子夫シフ〔三九ウ四〕
- 698 顛セン顛ト〔三九オ二〕
- 698 辛勤ギン〔三九オ二〕
- 696 謁エツ〔三八ウ〕
- 695 乳ジュ〔三八ウ〕
- 686 武勇ブユウ〔「勇」字右傍に「イタム」〕〔三八オ五〕
- 686 虎牙コガ〔三八オ五〕
- 685 蔡征虜サイリョ〔三八オ四〕
- 685 穎水エイ〔三八オ四〕
- 680 袁司徒エンシト〔三七ウ七〕
- 679 漢聘ハンペイ〔三七ウ七〕
- 679 嚴陵瀨エンレイ〔三七ウ六〕
- 679 殷夢イン〔三七ウ六〕
- 675 戚子セキ〔右傍「キ」は仮名古態〕〔三七ウ二〕
- 674 汲黯アツ〔三七ウ二〕
- 674 布被ヒキ〔三七オ八〕

- 753 磧セキ礫レキ〔右傍「キ」は仮名古態〕〔四〇ウ八〕
- 755 駑駘ドタイ〔四一オ二〕
- 758 象外シヤウ〔四一オ五〕
- 762 三閭リョ〔四一ウ二〕
- 783 瞻望セン〔四二ウ二〕
- 785 夫婿フシヨ〔「婿」字は大系本「聿」〕〔四一ウ二〕
- 786 窈窕ヨウテウ〔「窈」字は大系本「娘」〕〔四一ウ三〕
タウヤカナリ

〔参考文献〕

- 有坂秀世一九四一「帽子」等の仮名遣いについて」文学一七年七月、『国語音韻史の研究（増補新版）』三省堂一九五七所収
- 伊藤正義・黒田彰・三木雅博編著一九九七『和漢朗詠集古注釈集成第一巻』大学堂書店
- 井上正一九八四「古仏巡歴24 福井・妙楽寺聖観音立像」日本美術工芸五五〇
- 太田次男一九六六「釈信救とその著作について・附・新楽府略意二種の翻印」斯道文庫論集五
- 柏谷嘉弘一九八七『日本漢語の系譜―その撰取と表現―』東苑社
- 沼本克明一九八六『国語学叢書10 日本漢字音の歴史』東京堂出版
- 松原孝俊主編・中野三敏監修二〇〇九『國立臺灣大學圖書館典藏日文善

本解題圖録」國立臺灣大學圖書館

三木雅博一九八五「『和漢朗詠集私注』の変貌―平安末期から室町期にかけての「和漢朗詠集」写本の動向と関連して」梅花女子大学文学部

紀要国語・国文学篇二〇

柳澤良一編二〇一〇『石川県立図書館蔵川口文庫善本影印叢書2和漢朗詠集私注・文筆問答鈔』勉誠出版

山内潤三・木村晟・栃尾武編一九八二『新典社叢書10和漢朗詠集私注』新典社

山下立一九九六「福井県妙楽寺の懸仏について」史迹と美術六六・八

注

(1) 二〇〇〇年度の蔵書調査では和本二万二千冊以上が確認されたという(松原孝俊主編・中野三敏監修二〇〇九、八頁)。

(2) 冊子内に紙片があり、「私注は序のみ、本文に私注あらず(宮崎2005.9/12)」と記載されている。

(3) 井上正一九八四、山下立一九九六に妙楽寺について言及がある。井上論文に引かれる『妙楽寺縁起』(九条兼孝筆・寺蔵)によれば養老三年に行基が開山し、延暦十六年に空海が再興したことが伝えられるという。

(4) 覚明、信救とも。太田次男一九七二参照。

(5) 三木雅博一九八五による。このほか新日本古典籍総合データベース <https://kotenseki.nijl.ac.jp/> (二〇二〇年一月一日閲覧) に写本・刊本八点を数える。

(6) 以下、アラビア数字は本稿末尾の「注記付き一覧」に記した、川口久雄・

志田校注『日本古典文学大系第七三 和漢朗詠集・梁塵秘抄』岩波書店、一九六三に掲げる歌番号に対応する。資料に現れた仮名音形は()内に記した。

(7) 参考までに『和漢朗詠集』と同様に詩文を収録した『本朝文粹』の調査(柏谷嘉弘一九八七、四三五頁)を記せば、願文・諷誦文など仏教関係の巻を除くと漢音読みが大多数とある。

(8) 専修大学図書館蔵建長三年(一二五一)菅長成書写本は専修大学図書館蔵古典籍影印叢刊、一九八一によった。正慶元年(二三三二)校点本は複製日本古典文学館による影印、一九七五によった。

(9) 国会図書館蔵本は栃尾武『国会図書館蔵和漢朗詠集 内閣文庫増和漢朗詠集私注漢字総索引』新典社、一九八五)によった。

*本資料の調査にあたっては、國立臺灣大學圖書館特藏組(二〇一九年八月当時)の周嘉瑩氏に格別のご配慮を賜った。記して篤く感謝申し上げます。